

「台湾警察歌」の作曲者一條愼三郎氏の御業績を巡って—（再訂稿）

— 一條元美氏の御長逝を悼みて —

令和 4（2022）年 7 月 26 日（火）現在

（補訂経緯）

（本 HP 初出）：平成 24（2012）年 8 月 16 日（木）初稿作成

平成 26（2014）年 11 月 22 日（土）改訂稿作成

（一部補正）

令和 4（2022）年 7 月 26 日（火）再訂稿作成

（レイアウト全面変更、一部補正）

本年（平成 24（2012）年）7 月に入って、一條元美氏が去る 3 月 21 日に逝去されたことを知った。昭和 15（1940）年に台北高校、同 17（1942）年 9 月に東大をそれぞれ卒業されたと前にお聞きしていたが、享年 91 とのことである。謹んで哀悼の意を表するとともに、御冥福をお祈り申し上げる次第である。一條氏には御生前ついに拝眉の機会を得なかったが、十年程前の一時期、日本統治期台湾の代表的な音楽家であって「台湾警察歌」<sup>1</sup>の作曲者であった御厳父一條愼三郎氏（1870～1945）のことについて、書翰にてしばしば貴重な御示教を得たことがあった。改めて、その折のお教えに対し、深甚の謝意を表するものである。

私事にて恐縮ながら、かねてより日本統治下台湾警察史には多少の興味を有していたが、鷺巣敦哉氏<sup>2</sup>（1896～1942）が編纂した有名な台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』<sup>3</sup>の『第三編 警務事績編』（昭和 9 年 12 月 17 日刊）が昭和 61（1986）年 9 月 30 日に緑蔭書房よりが復刻され、「台湾警察歌」の作詞者が澤村専太郎氏（1884～1930）、作曲者が一條愼三郎氏であること（1187、1188 頁）を知った時は驚いた。

周知のように澤村専太郎氏は第三高等学校逍遥の歌「紅もゆる」（明治 38 年作）<sup>4</sup>の作歌で著名な澤村胡夷その人であることから、爾来同氏最後あたりの詩作と思われる「台湾警察歌」（昭和 3（1928）年末制定）の制定経緯に関心を持ったが、当時は現今のようなネット時代でなかったこともあって自力ではほとんどわからず、漸くその内容がつかめたのは、平成 14（2002）年秋頃に台北現地で調査された中島利郎先生の御教示に接し得てからである（「澤村胡夷と台湾警察歌」『台湾協会報』第 580 号〈平成 15（2003）年 1 月 15 日刊〉<sup>5</sup>参照。）<sup>6</sup>。

<sup>1</sup> 「台湾警察歌」：〈<http://www.geocities.jp/abm168/KOUKA/twkeisatu.html>〉参照。

<sup>2</sup> 本 HP 別稿「鷺巣敦哉氏著作目録抄—日本統治下台湾警察史の一齣—」参照。

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu002.pdf>〉

<sup>3</sup> 本 HP 別稿「鷺巣敦哉と『台湾総督府警察沿革誌』の編纂について—日本統治下台湾警察史の一齣—」参照。〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu001.pdf>〉

<sup>4</sup> HP「三高私説」：〈<http://www2s.biglobe.ne.jp/~tbc00346/component/>〉参照。

<sup>5</sup> 本 HP 別稿「澤村胡夷と台湾警察歌—日本統治下台湾警察史の一齣—」参照。

次いで、「作曲者一條慎三郎氏とは誰ぞや」ということをも併せて調べ、最終的には、根井はる様の御紹介で、一條慎三郎氏の御令息である一條元美氏に直接連絡がとれ、書状にて様々なことを教えていただいた。もとより同氏も御厳父については既に一、二の雑誌等で言及されておられた<sup>7</sup>。

当時その御教示の一端を「一條慎三郎について—日本時代台湾音楽史の一齣—」『台湾協会報』第 586 号（平成 15 年 7 月 15 日刊）<sup>8</sup>として寄稿したが、その後、旧台北第一師範学校同窓会壽智恵子様の御教示に拠り、同会報『芝山』第 15 号（平成 16 年 12 月 15 日刊）に「一條慎三郎先生を偲ぶ」関係論稿 7 編が掲載されたことを知り、また、一條慎三郎氏に関する詳しい記載がある岡部芳広氏『植民地台湾における公学校唱歌教育』（明石書店、平成 19 年 2 月 28 日刊。166 頁以下）<sup>9</sup>が刊行された。当該時期音楽史の知識に疎くてよくわからないが、一條慎三郎氏については、近年日台両地において多数の論著、ネット資料<sup>10</sup>等で言及されており、同氏の再検討、再顕彰が始まっているかの感がある。

---

[〈https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sawamura001.pdf〉](https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sawamura001.pdf)

<sup>6</sup> 「台湾警察歌」は、その後、大嶋知子氏「『紅もゆる』の詩人沢村胡夷」（平成 14 年 9 月 18 日講演、『紅萌抄』別冊（平成 15 年 3 月 (?) 刊）に収録。）16、17 頁、海堀昶氏（三高理科昭和 22 年卒、当時三高同窓会常勤理事）「澤村胡夷作詞の歌 新発見 台湾警察歌」（三高同窓会『会報』97 号（平成 15 年 3 月 31 日刊））10、11 頁及び高島俊男氏（1937～〔2021〕）『百年のことばお言葉ですが…⑧』（文藝春秋、平成 16 年 2 月 25 日刊）258 頁等で紹介されている。更に、最近では、下道郁子氏「七大学をめぐる歌 第 3 回「紅もゆる丘の花」（後編）」『U7』第 40 号（学士会、平成 23 年 10 月号 58～63 頁）59、63 頁でも言及されている。ちなみに、下道氏「紅もゆる丘の花」（前編）は『U7』第 39 号（学士会、平成 23 年 8 月号）64～68 頁所収である。HP「学士会」：[〈http://www.gakushikai.or.jp/magazine/u7/index.html〉](http://www.gakushikai.or.jp/magazine/u7/index.html) 参照。なお、同稿の紹介に関して、下記アドレス参照。[〈http://www.funaiyukio.com/funa\\_ima/index.asp?dno=201111007〉](http://www.funaiyukio.com/funa_ima/index.asp?dno=201111007)

・その後出た下道郁子氏「七大学をめぐる歌—その魅力と音楽的特徴—」『U7』第 59 号（学士会、平成 25 年 9 月号）31～41 頁は、「台湾警察歌」とは直接には関係ないが必読文献である。同氏は、平成 26（2014）年に入り、「台湾警察歌と澤村胡夷」（前編：『台湾協会報』第 714 号（平成 26 年 3 月 15 日刊）、後編：同第 715 号（平成 26 年 4 月 15 日刊））が公表された。音楽専門家による初の「台湾警察歌論」であり、貴重である。（「その後出た」以下、平成 26 年 11 月 22 日追加）

・平成 26（2014）年夏刊行の『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書（続）・雑誌所収著作補遺（続）・索引』（緑蔭書房、平成 26 年 7 月 31 日刊）解説中「参考資料 1 台湾警察歌」（297～300 頁）参照。なお、本 HP 別稿「『鷺巣敦哉著作集 補遺』（緑蔭書房、平成 26 年 7 月 31 日刊）概要」参照。

[〈https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu003.pdf〉](https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu003.pdf)（平成 26 年 11 月 22 日追加）

<sup>7</sup> 最近のものとしては、「【歴史に消えた唱歌 04】最初の唱歌集を作った男」（提供元：MSN 産経ニュース（2011.04.24））参照。[〈http://taiwan-news.tumblr.com/〉](http://taiwan-news.tumblr.com/)、

[〈http://taiwan-news.tumblr.com/post/5307160979/04#disqus\\_thread〉](http://taiwan-news.tumblr.com/post/5307160979/04#disqus_thread)

[〈http://taiwan-news.tumblr.com/post/5307160979/04〉](http://taiwan-news.tumblr.com/post/5307160979/04)

<sup>8</sup> その後、『鷺巣敦哉とその時代〔特別収録〕：『鷺巣敦哉著作集』補遺続集（第一輯）—日本統治下台湾警察史雑纂第四輯—」（平成 15（2003）年 8 月 1 日刊）に再録。

<sup>9</sup> [〈http://www.akashi.co.jp/book/b65484.html〉](http://www.akashi.co.jp/book/b65484.html) 等参照。

<sup>10</sup> 例えば、下記参照。

こうした中、日本統治期台湾音楽史研究のこよなき御理解者であった一條元美氏の御遠逝は、寔に悲しむべきことと言わざるを得ない。

(原文：平成 24 (2012) 年 7 月 13 日稿<sup>11</sup>)

---

[https://docs.google.com/viewer?a=v&q=cache:00MGcfffhnTcJ:www.ith.sinica.edu.tw/quarterly\\_download.php?name%3Dfulltext\\_16\\_3\\_2.pdf%26filename%3D126050307012.pdf+%E4%B8%80%E6%A2%9D%E5%85%83%E7%BE%8E&hl=ja&gl=jp&pid=bl&srcid=ADGEEsIkMkzi5hrogCn5zE2XatiSs6bWwdEbhshgvcfeA4AhxHJD7IWkTzNd9fw5ttDbHJjFamj4r\\_rhI6FEeZ3WU6qIhbb2nR4BUaZALKVHS7tdLkjm8dA9cPemro7nFamA19BEsQ9&sig=AHIEtbTvoJk5bfVUKUJYkpaguUS9IrWfw](https://docs.google.com/viewer?a=v&q=cache:00MGcfffhnTcJ:www.ith.sinica.edu.tw/quarterly_download.php?name%3Dfulltext_16_3_2.pdf%26filename%3D126050307012.pdf+%E4%B8%80%E6%A2%9D%E5%85%83%E7%BE%8E&hl=ja&gl=jp&pid=bl&srcid=ADGEEsIkMkzi5hrogCn5zE2XatiSs6bWwdEbhshgvcfeA4AhxHJD7IWkTzNd9fw5ttDbHJjFamj4r_rhI6FEeZ3WU6qIhbb2nR4BUaZALKVHS7tdLkjm8dA9cPemro7nFamA19BEsQ9&sig=AHIEtbTvoJk5bfVUKUJYkpaguUS9IrWfw)

<sup>11</sup> 『台湾協会報』第 695 号 (平成 24 (2012) 年 8 月 15 日刊) 第 1 面参照。